

平成二十七年年度「花のまわりみち」

俳句入選句

木村 里風子 選

特選

(三句)

「一席」

鍛造の音を聞きつつ花の道

淺田 洋子

(評) 金属素材を鍛造する機械の音がする。工程のどこかは分からぬが聞こえてくる。作業する人はと想像しながら花を賞でる。思いやりを感じさせる。

「二席」

手の平に思わず乗せる紅手毬

山本 彰

(評) 思わず乗せる。この措辞には美しさがある。手の平に乗せて、つくづく見る紅手毬の色が手の平に移るかも知れぬ。

「三席」

全身で笑ふ赤子や花の下

亀井 朝子

(評) 健康な赤子である。全身で笑うとは単刀直入の表現であり、一読して赤子の姿を目の前にする。多く言わないのが俳句。花の下の赤子。明るい句。

入 選

(五句)

逍遙しょうように傘など要らぬ花の雨

小早川 真(二真)

(評) 雨の中の花を鑑賞であり、花に心を遊ばせることに傘などは要らぬとは、悠々自適の心境か。

造幣や裏も表も八重に満つ

真部 宣則

(評) 造幣や、と上五を離しているのは造幣局を一つの場所にした。その建物の表も裏も美しい桜で満ちているのであり、花と工場が一体した景である。

貨幣打つ低き音洩れ雨桜

若宮 直美

(評) 貨・幣ともに「たから」の意味。工場の中で音がするが、花を見に来た人に遠慮の音が、低い音である。花に雨、低音がひびく。

花のみち雀の声と人の声

若宮 直美

(評) 花を見るのは人だけではないようだ。雀にも分かるのか、美しい花こそ人も鳥も心をなごます。声だけを捉えて、あとは読者の想像に委ねよう。

昭和より咲きつぐ花のまわりみち

小原 桂子

(評) 昭和四十二年に造幣局から移植され二年後から咲きはじめ、今年も咲いた。正に昭和の桜である。平和の花を絶やしてはならぬ。

佳作

(十八句)

旅の荷を預けて花の回り道

河村 幸子

地を掃きて雨に重たき八重桜

小田宗只(小田宗忠)

篝火なかりびの光うつして花の屑

白銀陽子

傘寿越しあといく度のまわり道

高田智汎

透明の傘に散りたる桜かな

中植紀子

八重桜枝のすき間に青い空

原田尚武

楊貴妃のさくら地に咲く房のまま

吉岡昌文(雅文)

花筏くづれ一筋動き出す

野津訓子(訓子)

濡れてなほ花びら拾う人のあり

岡田典子

飛花落花造幣局の灯のにじむ

大本ミサ子(長谷美白)

終活の一期一会に花めぐり

池上佳子(佳子)

踏み入りし一步を染めし落花かな

山岡祥子(祥子)

花の雨傘低くして廻り道

宮下ならう

枝わたる小鳥や花をこぼしつつ

正山史明

花の下で四ツ葉見つけたまわりみち

楠山東石子

声をかけ車椅子押す花の冷

村越 緑

幼児の手にあまりある花手毬

小田郁子

花の径数多の人よ平和都市

高橋幸子(幸子)

選者吟

腰たたきおうな媼今年の花仰ぐ

木村 里風子